

民間の子育て支援機関における支援の在り方と有効性の探索的検討 ー 利用者の語りの一事例から ー

石 晓玲

東京福祉大学 保育児童学部 (池袋キャンパス)
〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-22-1

(2021年11月29日受付、2022年6月9日受理)

抄録：本研究は、民間子育て支援施設を利用する事例を取り上げ、その支援の在り方と有効性について検討することが目的である。半構造化面接によるインタビュー調査と、質問紙調査を組み合わせた詳細な検討結果から、次の諸点が示唆された。①「孤立」、「第一子であること」、「完璧で育児書通りの子育て」といった点は、親の「うつ状態」に陥る背景要因となった。②民間子育て支援施設の「昔のおばあちゃんのうち」というあり方が利用者との信頼関係を培うのには重要で、それには孤立の解消、育児のモデルの提示、子どもと離れる時間の確保、一緒に楽しむ仲間によるリフレッシュといった支援効果があり、悪循環からの脱出につながった。③親が自ら支援を求め、施設利用につながる「被援助志向性」、且つ利用者の心に寄り添うことができる支援者の育成も必要である。最後に、本研究は1事例による探索的研究であることの限界と今後の課題について考察した。

(別刷請求先：石 晓玲)

キーワード：民間機関の子育て支援、あり方、有効性

緒言

地域での自然発生的な助け合いによる子育てへのバックアップが貧弱化してきている今日は、3歳未満の子どもの多くは家庭で養育されている背景と相まって、「孤育て」、「ワンオペ育児」と称されるように、核家族における養育の難しさが目立っている。70年代のコインロッカー・ベビー事件をきっかけに母性神話が崩壊し、80年代から育児不安の研究が盛んになり、現在に至っては多くの子育て世代の「自分が虐待をしてしまうのではないか」という虐待不安がクローズアップされるようになってきた。

児童相談所での児童虐待相談対応件数の推移をみると、統計が始まった1990年は1,101件だったが、2020年には205,029件と30年間に186倍に増え、過去最高となった。そのうち、50.5%を占めるのは「警察等」からの連絡であり、夫婦間の暴力が子どもの前で行われる「面前DV」を心理的虐待と判断して児童相談所に連絡するケースが目立つ。そして虐待のタイプ別では「心理的虐待」が121,325件(59.2%)で前年度と比べさらに増えた(厚生労働省速報値、2021年8月27日)。家庭内の家族間・親子間の葛藤状態の深刻化が顕著に表れている。

90年代から「子育て支援施策」が始動しはじめ、そのなかで虐待予防の一環として、親が抱えている育児不安やストレスを軽減し、子育ての孤立や、地域や必要な支援とつながらないことを防ぐために、「地域子育て支援拠点事業」がいま全国で展開されてきている。「子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場を提供」することを目的としているが、その支援の在り方や効果の検証は十分にされておらず、研究の蓄積がまだ薄いことは否めない。

そのような中で、乳幼児を持つ母親の心理的適応とその援助を研究した足立(1999)は、祖父母などの親族からは、子どもを預かったり、経済的支援を得られたりといった道具的サポート、友人からは、仲間としての情報交換や情緒的交流、また育児のモデルとしての機能、子育ての専門機関からは、親のニーズの即した専門的情報や学びが、それぞれのサポート源から得られる支援効果として指摘している。この研究の対象者は障害児をもつ育児中の母親であるが、二見・荒牧(2021)が一般家庭の育児ネットワークの機能について、子どもの世話や経済的支援は親族から、情緒的支援や情動的支援は親族外から得られやすくとまとめている。

中岡・小川・富田(2013)は、17カ所の地域子育てセンターに通っている子どもの親及び家族630名を対象とし調査した。その結果、子育ての悩みは多い順に、「子どもの健康や発達」、「夫婦で楽しむ時間がない」、「仕事との両立」などが挙げられている。そのような子育ての悩みやストレスの解消として、普段行っているリフレッシュ(気分転換)の効果があったものについての回答は、多い順に「配偶者との会話」(90.4%)、「友達等と直接的な交流」(90.0%)、「買い物」(89.1%)、「食べる」(88.4%)、「親との直接の交流」(88.1%)、「友人とのメール」(85.3%)、「子育てサークル(子育て支援センター含む)」(78.4%)、「親との電話」(79.6%)となった。身近にいる信頼できる人との触れ合いやコミュニケーションによる効果が大きいことがわかる。さらに、同研究では育児サポートのニーズとして、高い順に「交流の場」、「子育て相談の充実」や「一時的に預かってくれる場」などが挙げられた。

その一方で、交流の場が整えられている地域子育て支援拠点の利用に当たり、緊張と不安を抱えながら、利用者がどのように心理的プロセスの変容を遂げるのかを検討した研究がある(上田, 2018)。それによれば、「何度も通うようになるまでのプロセス」、「場になれるまでのプロセス」、「場から学ぶプロセス」、「子育ての居場所ができるようになるまでのプロセス」があった。それに対して、支援者が利用者の緊張した状況を把握し、適切な声掛けなどによる「アプローチ」、「創意工夫」、「橋渡し」することが必要だった。さらに、孤立無援の状態拠点を利用し始める人が多いため、「孤立解消」だけでなく、親となっていく過程の不安の強い時期の親を支える場としての機能が求められていると考察している。

以上のように、子育て中の親のニーズや利用者側の心理を当たった調査研究が見受けられるが、これまでに焦点に入りにくい民間施設の利用で起こる利用者の心理的变化とその後の子どもの発達という視点からの研究が見当たらない。本研究はこの視点から民間の子育て支援施設の利用者にインタビュー調査を行い、支援の在り方や支援効果を詳細に検討することを主な目的とした。なお、本研究では1事例を丁寧に分析することで、個人の体験する困難および支援によって克服するプロセスを明らかにし、事例に内在する普遍性・規則性を探求する目的に沿い、親が感じていた子育ての困難およびその後の子どもの発達の状況を質問紙調査にて測定することも同時に行った。そうすることで、子育て支援が充実しつつあるにもかかわらず、子育てのストレスや困難が深刻化になることについて、何らかの糸口が得られ、今後の支援に示唆が得られると期待している。

研究対象と方法

1. 研究対象者

A地区の複数の民間子育て支援機関関係者に研究目的と方法を書面と口頭で説明し、研究の協力を得た。そのうち、子育てで「うつ状態」になったが、某NPO法人が行っていた子育て支援事業の「一時預かり保育」を利用することで乗り越えた利用者Aの事例を本論文では取り上げる。

利用者Aは、専業主婦であり、主人の転勤でA地区に転居した。長男が3歳になる頃から支援機関を利用し始め、2年間ほど利用していた。その後、主人の転勤で地元である田舎に戻ってから、4歳年下の弟が生まれた。現在は長男が高校生、次男が中学生になった。利用者Aは、長男が小さい頃の育児困難の状況を乗り越えており、当時を振り返って答えるという後方視的研究デザインである。こうすることで、当時の状況や経過、そして現在の子どもの発達状況まですべての情報を収集することができ、また倫理面を考慮しても当時と距離を置いて語りやすいと考えたからである。

2. 調査方法

インタビュー調査は、インタビューガイドに基づいて半構造化面接を行った。面接時間は90分である。調査期間は2021年4月であったため、新型コロナウイルス予防のため面接はZOOMで実施した。

利用者Aのインタビュー調査内容は、支援施設を利用するきっかけ、施設のサービス内容、利用による自分や子どもの変化、利用時の子育ての困難およびその克服過程、家族やママ友との関わり、子どもとの遊び、子育て支援に必要なことなどから構成されている。同時に、当時の状況を思い起こして、子育ての困難やその関連要因を問う質問紙調査にも回答してもらった。具体的な調査内容は、育児不安尺度(田中, 1997)、多次元完全主義認知尺度(小堀・丹野, 2004)、精神健康調査票(GHQ-28)(中川・大坊, 1985)および中谷・中谷(2006)を参照し作成した虐待行為傾向尺度などからなっている。

さらに、本事例の利用者Aが長男の子育ての困難さを克服した経験より、子育ての自信および子どもや周囲との関わりの軸ができたと考えられる。その後の第2子の養育はスムーズで、現在の子どもの発達状況から「報われた、無駄ではなかった」と利用者が強く感じていた。幼少期の関わり方とその後の子どもの発達との関連を従来から指摘されており、このような養育上の長期的な効果を視野に入れ検討するため、余裕のある養育態度を受けてきた次男が認識する幼少期に親とどう関わったか、現在の学校生活に適応

しているかどうかについて調べた。次男に回答してもらった質問紙調査は、一項目で問う学校満足度の評価、学校生活適応感測定尺度（浅川・尾崎・吉川，2003）、および先行研究（廣瀬，2014；内田，2017；山本・平野・内田，2005など）を参考にし、自作した4つの強制選択項から選べるようにした「親子の関わりパターン」、および7項目からなる「具体的な親子の関わり」から構成されている。

3. 分析方法

インタビュー調査は、ICレコーダーで記録した内容を逐語でテキスト化した。質的分析においては、記述内容を意味の類似性からグループに分類し概念化した。今回は典型例のケーススタディであるため、詳細な記述分析に徹し対象者の考えや思いを反映すべく、ひとまとまりとなっている語りの内容を切片化した。その後、個々の内容に対応する小カテゴリーを付し、小カテゴリーの上位概念としての中カテゴリーを付け、さらにその上位概念に大カテゴリーを付けた。分析の視点は、子育ての困難に関わる「孤立」、「人間関係」、「育児に関わる信念」、および「施設利用効果」、「子どもの成長」などを軸にした。なお、ケースの豊かな内容を明示するため、小カテゴリーの語り例を一覧表に載せず、各テーマに沿って本文中に入れた。質問紙のデータは、それぞれの尺度を点数化し、インタビュー調査の内容の理解に補足的に用いた。

4. 倫理的配慮

事前にインタビュー調査・質問紙調査の研究目的とデータの扱い方などについて口頭と書面による説明を行い、同意を得たのち研究協力承諾書を取り交わした。倫理的配慮として、調査自体は匿名で行い、すべてのデータは厳重に管理し、不必要となった際には、直ちに復元不能な廃棄処分すること、また研究への協力は自由意志によるものであり、不参加でも不利益を受けることはなく、いつでも面接や調査を中断、撤回することとした。また、調査の内容を研究資料として使用し、その際に個人を特定できるようなことを含め協力者に不利益を与えることがないよう配慮することを説明し、学術研究で公表する許可が得た。なお、本調査は東京福祉大学倫理・不正防止専門部会の承認を得ている（東福大倫審2018-06号）。

結果

1. インタビュー調査の結果

インタビュー調査では、長男の施設利用する時期を重点に置きながら、次男の子育ての様子なども尋ねた。まず、

長男が3歳頃の施設利用時の内容について、上記に述べた分析の視点からカテゴリーを付け、小カテゴリー・中カテゴリー・大カテゴリーを抽出したものを表1にまとめた。なお、本稿では大カテゴリーは【 】、中カテゴリーは『 』、小カテゴリー〔 〕、具体的に語った例を「 」で表す。また〈 〉で示したのは、インタビュー調査実施者の質問であった。（ ）は語りの文脈がわかりやすくするように、筆者が必要に応じて足した言葉であった。さらに、インタビュー調査データに出た固有名詞は、特定できないように符号化した。

1-1 子育ての困難さ

表1のように、【子育ての困難さ】は『びくびくで育児』と『ワンオペ育児』から構成されている。『びくびくで育児』の下位にある〔音漏れによる近隣への気遣い〕に関する語り例として、「とにかく使える部屋がなくて、マンションだったので、子どもがジャンプしたら、下に響かな、絶対いまの音が聞こえるかな、びくびくしながらの子育てなので、煮詰まりました。本当に!」、「その狭い場所で、田舎と違って狭いし、子どもと向き合っていたら、どうなるでしょう。私もいっぱい、いっぱい、本当にいま虐待っていうけど、なんというか。本当にチャレじゃないね。そう思うような感じです。」があった。

『ワンオペ育児』は〔子どもの病気時の困り感〕、〔自身の病気時の困り感〕、〔うつ状態でも自己完結〕から構成された。〔子どもの病気時の困り感〕に関しては、「特に子どもが病気の時も、自分もきついのに、一日出かけないといけないとか、何日間も病気が続いていると、本当にかわいそうなのに、だれも助けてくれない。主人も出張で出かけていないのに、こっちも病気になりそうで、私が倒れたら、誰が面倒見てくれるだろうといつも不安で葛藤した感じです。」であった。また（子どもから自分に）うつるかもしれない、自分が病気になったりとか、誰が面倒をみてくれるとか、いつも頭にグルグルしたりして。」の内容から、〔自身の病気時の困り感〕を表している。〔うつ状態でも自己完結〕に関しては、「いつも眠いなあという感じ、夜も泣いたりして、もうちょっと寝たいなあ、眠れないことがなかったけど、常にもやもやで、眠気があった気がします。」、「主人に言わなかった。仕事もあり、いなかったり、帰りも遅くて、言ったところで解決もなし、という感じですね。やっぱり休んで手伝ってというのは、どうい、育児休暇はいまあるかもしれないけど、そういうの、しなかったというか、はい。」、「親に電話したところで、何も解決にならないし、心配するので。友達に、でも同年代の子どもを持つ友達がいないので、なんといったらいいかな、自己処理というんですかね、

表1. 「A地区での一人目の孤立した暗黒時代の子育て」に関する分類一覧表

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
I 子育ての困難さ	1 びくびくな育児 2 ワンオペ育児で生じる困難さ	1 音漏れによる近隣への気遣い
		2 子どもの病気時の困り感
		3 自身の病気時の困り感
		4 うつ状態でも自己完結
		5 だれとも相談できない状態
II 育児書通りの子育て	3 一人目で完璧を目指すこと	6 食事の手作りへのこだわり・葛藤
		7 絵本のよみきかせ
		8 幼児英語教育
III 施設の利用	4 利用するきっかけ	9 情報探索
		10 児童館のチラシ
	5 サービス内容	11 利用時間・料金
		12 昔のおばあちゃんのうちの遊び
	6 利用効果	13 子どもの変化
		14 子どもとの関係性の変化
		15 自分自身のリフレッシュ効果
		16 うつ状態の改善
IV 周囲の人間関係	7 ママ友との関わり	17 深入りしない
		18 軽く楽しむ
	8 保健婦さんとの関わり	19 家庭訪問で子育てが責められる
		20 相談先で傷つき
		21 保健婦というトラウマ
		22 支援拒否
V 子どもとの遊び	9 外遊び	23 公園の砂場遊び、散歩
	10 家での遊び	24 子どもが好きなテレビ・DVDなど
VI 現在の子どもの成長	11 勉強は子どもに任せる	25 言わなくても自主勉強
	12 英語教育の効果	26 リスニングが聞き取れる
	13 報われると感じる	27 苦労が無駄でなかった
VII 子育て支援の心得	14 一人でない子育て	28 複数の人の関わりが重要
	15 頼るのが恥ずかしくない	29 頼れるものはなんでも頼る

音楽を聴いたりとか、夜にテレビをみたりとか、そういう感じでやり過ごしたと思います。」となっており、だれとも相談できない状態であった。

1-2 育児書通りの子育て

【育児書通りの子育て】は『一人目で完璧を目指すこと』に起因しており、さらにその下位に「食事の手作りへのこだわり・葛藤」、「絵本のよみきかせ」、「幼児英語教育」が付随している。「子どもを優先して、はじめての子どもだったので、きっちりと本の通り、ここはこうだ、ここはこうしなければならないという強迫観念に囚われて、こう力を抜くとかわからなくて、逆に力を抜いたらだめと、本にガチガチに。母親を見ながら子育てするというのができなかった、本の通りだと勝手にイメージをガチガチしてしまった感じです。」という風であった。育児書に囚われ

ていた例として、「食事の手作りへのこだわり・葛藤」では、「子どもにちゃんと、栄養バランスの食事を手作り、なんといふかな、手作りはこうでいいのかな。食べてくれなかったり、薄味すぎるかなと、日々食べさせるのに、戦いです。」「食が細いです。何か食べさせたらいいのか、と苦労しました。真剣につくったのに、食べてくれないと、なんでなんで、なんで食べてくれないの子どもを叱ったと思います。」と話していた。

また、「絵本のよみきかせ」に関して、「やっぱり、絵本をよみきかせないといけないとか。子どもの興味があったものだったら、自分で見てくれるだろうけど、これがいいという絵本をよみきかせていたと思います。本当に、児童書、本の通りの子育てしていたと思うけど。自分はそれがいっぱい、いっぱいです。よみきかせも。こうしないと、こうしたいとか、石頭になったかもしれないけど。」<それに対

する子どもの反応は？>「いまいちでしたね。いいと言われた本はたい面白くなかったかもしれないです。何歳健診でこういう本がいいと紹介されて、子どもが選んだのでなくて、おすすめの本を本屋で何冊を買って帰って、でも反応がよくなかったです。」と述べている。

さらに、〔幼児英語教育〕に関しては、「これも頭でっかちかもしれないけど、小さい頃に英語を入れると大きくなったら英語が自然と出ると、英語教室でみて、勝手にうちの子がこういうのをさせると将来外国の方とペラペラしゃべるのという夢を作って、1歳半から近所にある英語教室に入れて、外国の方と触れ合える環境に入れた」となっている。

1-3 施設の利用

利用者Aは上記のような育児困難感を抱え孤軍奮闘しているなか、外へ繰り出して支援情報を求めるようになり、民間子育て支援施設B（NPO法人が運営する一時預かり保育）を利用することに辿り着いた。【施設の利用】の『利用するきっかけ』は〔児童館のチラシ〕である。『民間サービス内容』の〔利用時間・料金〕について、「児童館で知り合った友達は、一緒に施設Bのチラシをみて、ここだったら、利用できるね、一緒にランチできるねとか。友達同士で集まって、2時間で、リフレッシュして、ニコニコして帰って、「先生、ありがとうって」。みなで利用して、なんかいいじゃない、安いので、1000円だったら、抵抗するかも、1時間500円だったので、週に2回預けたと思います。」と述べており、大変満足していたことが伺える。施設Bでは〔昔のおばあちゃんのうちの遊び〕となっており、「施設Bはおばあちゃんのうちの感じで、私が育った昭和のおばあちゃんのうちという感じでC先生がしていただいて、もちろん、あの、ピカピカなおもちゃがなにもなかったけど、昔ながらの折り紙とか、お絵描きとか、夏だと、樽にお水でパシャパシャしたりとか、何か小さい頃のおばあちゃんのうちのような子育てをしていただいて、なんというかな、キラキラのおもちゃでなくてラッキー。秋は落ち葉を拾ったりして、本当に季節感のある子育てをして、本当に良かったです。」と高く評価している。

そのような支援の在り方は、『利用効果』につながっており、〔子どもの変化〕、〔子どもとの関係性の変化〕、〔自分自身のリフレッシュ効果〕、〔うつ状態の改善〕があった。まず、〔子どもの変化〕は、「最初は、人見知りもあったので、なにここはとグズグズしていたが、だんだんここは友達と会えるとわかってきた、全然いきたいよという感じでした。」「先生と友達と遊んで、（迎えて）あったときに「あ〜！」と言って、こういう遊びをしてたよと、親子にとってなんと

いうか必要な（分離する）4時間でした。」、またそれまで困っていた子どものトイレ・トレーニングも、「うちはおむつはずれが遅かったので、失敗してしまったりすることがあったので、何でおっしこなのに言わないの、小さいから言えないのに、責めてしまいます。」<子どもの反応は？>「やっぱり自分はなんで怒られているのかと思った時期が多くて、こっちもヒートアップする感じでした。でも、施設Bではじめてできるようになりました。施設Bは和式トイレで、最初はできないなあと思ってたんですけど、友達がおっしこいくといって、二人で電車みたいな形でできました。C先生からできたよと言って、え？ 洋式ができないのに和式でできたの？ 本当に施設Bに感謝しかないです。」とのことだった。

〔子どもとの関係性の変化〕には次のように述べている。「変わりました。自分がいらいらしていたから、ガミガミで、どうしてもわからないのと怒っていたけど。自分が楽しいことをして、4時間預けて、その後に「ただいま」と、「会いたかったよ」と、いつもくっついていたのを離れたことによって、会いたかったよという気持ちが段々強くなったと感じます。子育て、やはり自分だけではだめなんですよね。子どもに向き合う気持ちが暖かいものに変化したことがわかる。

〔自分自身のリフレッシュ効果〕も、「施設Bだと、子どもを預かってくれるし、その間、親がリフレッシュできるから、これを利用しないと、こっちも大変だし、いっぱい、いっぱいだし。それで利用することにしました。料金が安かった、1時間500円、10時から2時まで預けて、A地区は高いけど、ここだったら最安値で2000円だと4時まで預かってくれるので、その間、美容院に行ったり、マッサージしてもらったりして、子育てに戻れたので、施設Bに助けられました。」と述べている。

〔うつ状態の改善〕については、「もうあの〜、うつ状態になりかけたかもしれないけど、そういう気持ちはパッと晴れた、もやもやは晴れて、今度木曜日があるからそれまで頑張ろうかな、施設Bがあるから、マッサージにいくかな、髪きりにいくかな、ちょっとパーマかけようかな、ちょっとお茶しようかなと、楽しみができて、それも子どもにいいほうに影響したと思います。」<改善できたと感じたのはいつ頃ですか？>「利用して半年くらいで。友達とランチで楽しむ、おいしい。家だと子どもに合わせていつも薄味とか、そういう柔らかいものしか食べられなかったもので、外だと自分の好きなものを食べられたので、私の場合は軽かったかもしれないけど、半年くらいで涙とか、全然なくなったと思います。」という順調な回復経過があった。

1-4 周囲の人間関係

【周囲の人間関係】は『ママ友との関わり』と『保健婦さんとの関わり』から構成されている。『ママ友との関わり』に関して、[深入りしない]と[軽く楽しむ]ように気を付けていたという。「やっぱり、あんまり本当の友達ではないので、あまり深く、家庭のほうに深入りしない、子どものお母さんということで一緒に付き合いをしていました。子どもを通じての友達しかいなかった。」「その人が抱えているもの、いろいろ相談されて、自分は抱え込みたくないというのあって、ちょっとどういう環境かも知らないの、浅く広くていいかな、っていう感じですね。」「軽い悩みなどいいですけど、ヘビーな悩みだったら、こっちも対処しきれないとか、こんな家庭のことを知ってもいいのかな、別の問題も出てきそうで、子どものお母さんとして、ランチの時でも、軽い話題とか、芸能人の話題とか、あたりさわりのない話ばかりして過ごしたと思います。」とあくまでも本当の友達でなく、子どもを通じて知り合ったママ友という扱い方で、とにかくトラブル回避を優先していたと述べた。ここで言及されているママ友とは、転居したA地区で子どもを通じて知り合ったママたちで、一緒にB施設を利用したりしていた。

『保健婦さんとの関わり』は、[相談先で傷つき]、[家庭訪問で子育てが責められる]を経て[保健婦というトラウマ]を持つようになり、[支援拒否]に陥った。「もうそれは、私はせっかく保健婦さんがきて、うちの一番目の子は言葉が遅かったの、保健婦さんが伺ってきてくれたのに、私、保健婦さんに言われたことに一番傷ついて、落ち込むようなことしか言わなく、うちの子はちょうどおかしいのかな、ちょっと異常があるのかなと、さらに落ち込んで、一人っ子だったので、あまり、ああいう役所、なんというか」とあるように、[相談による傷つき]となっていた。また、「家に行って指導しましょう、と一回来られて、でも本当に落ち込むことしか言わない。これは何ヵ月言葉が遅かったから、発達検査の必要があります。そういうことしか言いませんでした。役所（の決まり事）を並べるばかりで励ましもなく、落ち込むばかりで、なんか保健婦さんとしゃべらないほうがよかったと、今では思います。結局勧められた別のところに相談すると、言葉が出なかったのは、私の育児が悪かったせいで、なんというか、一人で泣いていて、語りかけが少なかった、と言われました。そういう話を聞いて、さらに落ち込みました。それより落ち着くまで待って、そんな早い段階から心配して、そういう役所の人に聞かなければ良かったです。発達の仕方って人それぞれ違うらしく、後からすぐ出る子もいれば、貯めて、貯めて出る子もいると聞いて、その時待ちきれなかったのですけど、

もうすこし待てば良かったです。」の内容から、[家庭訪問で子育てが責められる]経験を強くした。

「相談したけど、なんでも流れ作業、こうだからこうでしかしてくれなくて、やはり、役所というか。」「ここまで1歳2月で言葉が出ないと、3語が言えないと、マニュアルに、ほかの子がしゃべったけど、うちの子が言えなく、なんか落ち込んでいましたね。もうちょっと、マニュアル通り、この時点で3語が言えなく、こういうところに行ったらほうがいいですね。」と言われ、「暗黒だったような、結局、自分のせいで、自分が言葉がけしなかったね、その後分かったけど。子育てが悪いんだろうね。自分だけのせいに、何かかも、子育ては全部自分のせいで、数人で関わらないと、全部悪いほうに行っちゃうと分かります。ここで発達検査に引っかかったのも、自分の子育てが悪かったし、自分一人でしかいなかったから。お母さん、これさせてますか、何か追い込むような、そんなことするんですか、なんかトラウマですね。保健婦さん、もう結構ですと断ったんですね。」とのように、[保健婦というトラウマ]を持ち、[支援拒否]をした経緯があった。

1-5 子どもとの遊び

【子どもとの遊び】は、『外遊び』は[公園の砂場遊び、散歩]となっており、『家での遊び』は[子どもが好きなテレビ・DVDなど]となっている。具体的には、「家で、一通りおもちゃを買って遊ばせて、飽きてくるので、そして、テレビとか、子ども向けのDVDを付けてみせると、キャーキャーと子どもが喜んでいたので、どんどん子どもが喜んでいたように流されたと思います。」「テレビとかの幼児番組で、子どもは手でこう拍手して喜んでいたので、その喜んだ方がいいかなと、親子で遊ぶのはあまりしなかったんです。」「一日中テレビを見させるのもいけないので、公園に連れていて、散歩とか、砂場遊びとか遊ばせたと思います。」

1-6 現在の子どもの成長

【現在の子どもの成長】は、『勉強は子どもに任せる』であり、二人とも[言わなくても自主勉強]すること、『英語教育の効果』で[リスニングが聞き取れる]こと、また『報われると感じる』のは[苦労が無駄でなかった]こととまとめられている。「勉強について口出ししなく、自主勉させることですかね、あと挨拶、しつけはあまり口出ししなかった。自分で勉強、やってくれているので、言わなくても良かったですね。本当に施設Bがよかったなあ、その時代で。」「幼児の英語教育も効果があったのか、テストで単語が間違っても、なぜかリスニングが聞き取れる。」「やっぱり、子どもがいたからこそ、こういう暗黒の時代もあったが、

いたからこそ、いまは大きく成長し、その時の苦労は無駄じゃなかったと身に染みていた。いま、ちょっと報われているかな、はい。」との内容であった。

1-7 子育て支援の心得

利用者A自身の経験から得た【子育て支援の心得】は『一人でない子育て』が必須で、〔複数の人の関わりが重要〕であるとなっており、『頼るのが恥ずかしくない』から〔頼れるものをなんでも頼る〕という被支援志向をしっかり持っている。「協力がやっぱり大事で、一人だと、こっちの気持ちが沈むと子どもに当たるし、こっちが明るい気持ちでいると、子どもにも余裕をもって接することができるし、やっぱり、誰かの協力が不可欠だと思います。」「一人目では慣れないし、どうしたらいいのかわからなかったし、育児書しか頼らなくて、地元でないのも、どこで誰に頼ったら、も知らなく、人に頼っていいとわかったら気持ちが楽になったので、頼れるものに頼らないと、後になって私は思いました。私の経験から言って、一人で頑張らないでということですね。頼れるものなら、本当なんでも頼って、

あの、頼ることは恥ずかしいことじゃない、逆に子どもをちゃんと育てたいなら、自分の気持ちは病気がない状態ではないと、ちゃんと育てられないというのが、あの、言いたいことですね。」と語った。

1-8 抽出したカテゴリー間の関連の図式化

上記に述べた主なカテゴリー間の関連を、これまでの先行研究からの知見を踏まえて、「暗黒時代の子育て困難（うつ状態）から克服していく過程」の視点からまとめ、図式化した（図1）。図1に示されているように、育児困難の直接的背景要因は、「ワンオペ育児」と「びくびく育児」であるが、それが「育児本通りの育児」を生み、その先に「子どもとの葛藤」が生じて、「相談できない人間関係・孤立」が続くと、「うつ状態」になってしまう。追い詰められたら、いっばいの状態になると、さらに一人で育児本に頼り子育ての葛藤が生じるという悪循環に陥ってしまう。

転機になったのは、「外へ援助探求」であった。「民間施設利用のきっかけ」によって、「昔のおばあちゃんのうちの遊び」で行う「民間施設の利用効果」を体験し、「子どもの

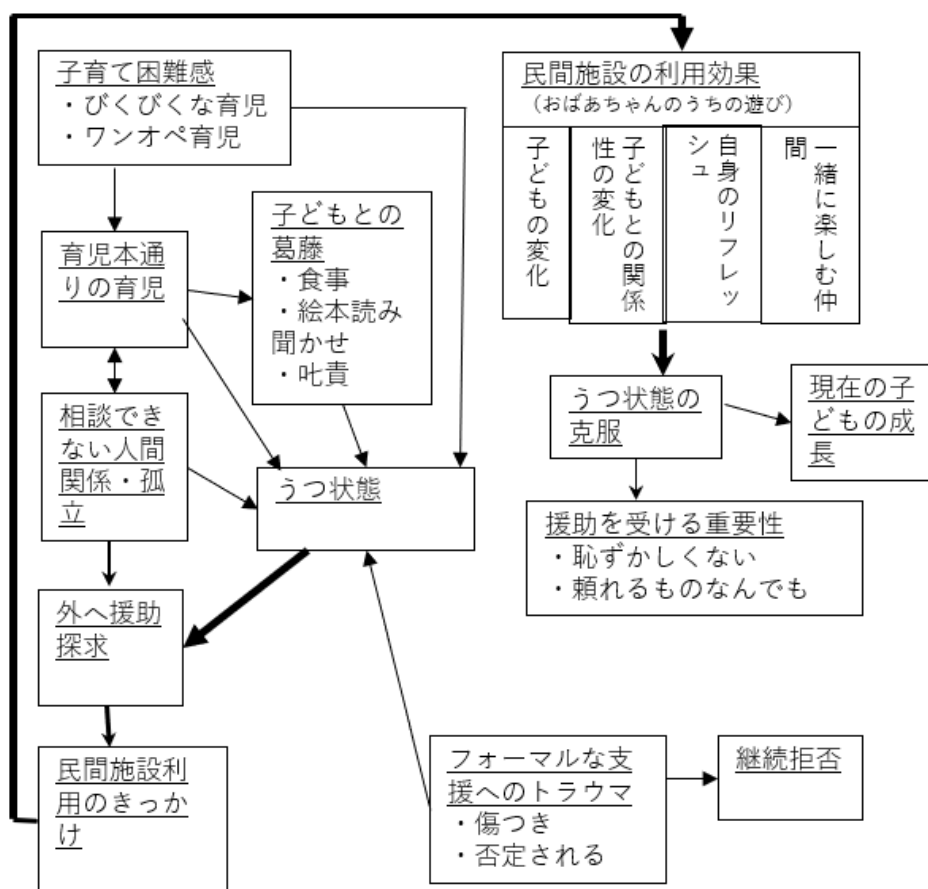


図1. 暗黒時代の子育て困難（うつ状態）から克服していく過程
（注：→は影響の方向性、線の太さは影響の強さを示す）

変化」「子どもとの関係性の変化」「自分自身のリフレッシュ効果」「一緒に楽しむ仲間」を経て、「うつ状態の改善」に至った。ここで利用者Aは、民間施設のサービス料金が低く手軽に利用できること、また「昔のおばあちゃんのうち」という存在のありがたさに度々言及している。そして、現在の「子どもの成長」があり、苦労した子育てが報われるという実感につながった。このような経験より、「頼るのが恥ずかしくない」「頼れるものはなんでも頼る」ことが重要で、子育ては母親一人ではなく、複数の人の関わりが必須との結論に至った。

その一方、行政による「フォーマルな支援へのトラウマ」を抱える経験から、「継続拒否」につながったという残念な経験も併せて持っていた。

1-9 質問紙調査からみた利用者Aの当時の状態

インタビュー調査と同時に、子育てでいっぱいになった当時を振り返り質問紙調査にも回答してもらった。育児不安は、理論値の満点40点中32点、完璧主義の総得点は理論値の満点60点中33点となった。精神的健康度(GHQ-28)の総得点は12点で臨床群に分類される。その下位スケールを見ると、「身体的症状」が中程度のほか、「不安と不眠」・「社会的活動障害」・「うつ傾向」のいずれも軽度の症状となっている。これまで筆者が行った乳幼児の母親を対象とした大規模調査のデータ(石・藤村・荘厳・関口, 2020)で算出した育児不安、完璧主義、精神的健康度の平均値と比べると、いずれも得点が高かった。また虐待行為傾向は、たまた「手を叩く」のはほとんどないが、「子どもを無視する」「子どもを傷つけるようなことを言う」「子どもの前で激怒する」「話かけをしてあげない」に関しては一度もないとは言えないとなっている。このような結果は、利用者が語った「いつも眠く、手いっぱいの軽度のうつ状態」にあったことと合致している。

2-1 次男に関する子育てインタビュー内容

先行研究のアンケート調査に参加した高齢者に参加をさらに、次男の子育てについては、長男の幼少期の第一子で孤立した子育て状況と対照的に、スムーズだった。【暗黒時代との違い】のは、『田舎での子育てしやすさ』、『祖父母との交流』であった。「4つ離れて次男が生まれ。上の子は、勝手に幼稚園の友達とかできて、言葉が出るのも遅かったので、それでもおなかのすいたとか、痛いとか言えたので、手が離れて、下の子に関われることもあり、何と言っても、B施設のC先生に預けるあの一人の暗黒の時間と違います。」「一人目は自分一人で騒いでいたけど、2番目はわりと落ち着いた。一人で泣いた、喚いた、何でもかき鳴らしたと騒

いだ感じですね。」との内容から、一人目と違って余裕を持って子どもに関わることが伺える。

また、「田舎に帰ったので、土地カンもあって、ここはこういう遊びがあるなあ、ここに行ったら遊べるなあ、そういうのがわかっているの、田舎なので、車でスイスイ連れていけるので、幼稚園も田舎なので、子ども3歳からすんなり幼稚園に入って、幼稚園が大好きなので、先生とか、友達とかと遊んで、ニコニコ帰ってきて。」「1歳の時から、公園で遊んだり、じいちゃん・ばあちゃんのうちで遊んだりして、不思議と下の子の小さい時はあまり覚えてなく、多分すんなりで行けたので、あまり覚えてなくて、上の子の記憶ははっきりとあるのに、下の子の記憶がないのです。普通に過ごせたからだだと思います。」と語られ、祖父母との交流や、田舎の子育てのしやすさもあり、子育てがうまく行っていた。

2-2 次男に関する質問紙調査の内容

中学生になった次男に質問紙調査を記入してもらった。一項目で問う「学校生活満足度」は最高評価の「満足している」となっている。学校生活適応感測定尺度の「部活動への意欲」「自己肯定感」「家族との関係」「教師との関係」「友人関係」「進路意欲」「学習への意欲」の各側面は、いずれも「そう思う」「ある程度そう思う」と評価している。現在の中学生生活は、良い関係性を持ち、学習意欲もあり、充実している様子が伺える。また小学生までの親からの関わりについては表2の通りの結果だった。関わりパターンは内田(2017)が記述したインタビュー調査から見出される「協同型しつけ」に合致しており、親子間の暖かい交流ができています。また、「具体的な関わり」についても、「絵本のよみかせ」と「自然との触れ合い」以外は、すべてポジティブに評価しており、子どもの自律性や親子間の良い相互作用が読みとれる。

考察

本研究では、これまでの先行研究で焦点を当てることがあまりなかった民間子育て支援施設の利用により、子育ての困難を抱えた利用者が「うつ状態」という悪循環から脱出できた事例を取り上げ、その支援の在り方と有効性について検討することが目的であった。ここで主な結果をまとめ、以下のように考察する。

まず、本事例が抱える育児困難から生じる「うつ状態」という悪循環についての理解は、次のように考えられる。3人で構成されている核家族で、かつ転勤族であることから、利用者Aは「ワンオペ育児」と「びくびく育児」となっており、

表2. 小学生までの親との関わりについて

「関わりパターンの選択肢」	「回答」
<p>・あなたに対して、あなたの親はどのような接し方をしていましたか？ A、B、C、Dの中から、印象の近いもの一つに○印をつけてください。</p> <p>A. 親が遊んでくれたり、外出や旅行につれていってくれたりして、一緒に触れあうことが多い方でした。また、困っている自分に話しかけてくれるなど、私の気持ちや意見を尊重してくれていました。</p> <p>B. 親の言う通りにしないと、何度も小言を聞かされるので、家の決まり事などを守るようにしつけられていました。何か悪いことをしたら、罰を受けることもありました。</p> <p>C. 親は子育てを頑張っていると思いますが、多忙や疲れなどの理由から、声をかけてもらったり遊んだりすることがほとんどありませんでした。</p> <p>D. 上記のA、B、Cのどちらかに当てはまらない場合は、具体的に記述してください。</p>	○
「具体的な関わりの項目」(4件法)	「回答」
Q1. 親と一緒に楽しく遊びましたか？	2. まあまあ楽しく遊んだ
Q2. 寝る前や学校が休みの時などに、親に絵本の読み聞かせをしてもらいましたか？	4. 読み聞かせをしてもらっていない
Q3. 家のお手伝いをどのくらいしていましたか？	2. 時々お手伝いをしていた
Q4. あなたは親から「勉強しなさい」といわれましたか？	4. 言われたことがなかった
Q5. あなたが困った時に、親はあなたの話を聞いてくれましたか？	1. 話をよく聞いてくれた
Q6. 親と一緒に自分のものを買いに行くとき、あなたの意見はどのくらい通っていましたか？	2. 親がアドバイスすることがあるが、最後は自分で買うものを選んでる
Q7. 土曜日や日曜日に、親と一緒に自然体験活動を行うことができましたか？	3. あまり自然と触れ合うことがなかった

それが育児困難の直接的背景となった。その中で、完璧に頑張ろうという思いや身近に育児モデルがないことから、「育児本通りの育児」につながった。それが母親と「子どもとの葛藤」を生じさせ、「相談できない人間関係・孤立」の中で、母親がいっぱいになり、「うつ状態」となった。その「うつ状態」がさらに子育ての困難を増悪するという悪循環に陥った。本人の振り返りの言葉からも、この時期は「暗黒時代の子育て」と表現されている。

この事例では民間施設を利用することで、「うつ状態」を克服し、その後の親子間の暖かい関わりと子どもの成長への喜びにつながっている。利用した施設Bのおかげ、ありがたい存在という言葉が語りの中からたびたび出現した。そして、施設Bではキラキラのおもちゃでの遊びでなく、「昔のおばあちゃんのうちの遊び」が、子どもの成長、親子間・仲間間の楽しさ、本人のしたいことができるというリフレッシュ効果につながったと利用者が認識していた。ここでの「昔のおばあちゃんのうち」という存在は、この事例の子育て困難感を生んだ孤立、育児モデルのなさ、子どもと離れる時間のなさ、一人による子育ての限界といった各側面を解消することができたと考える。これは、まさにいま地域のコミュニティの希薄化している中、育児の社会化、複数の人による子育てという方向性に沿った支援となっている。

ここで語られている「昔のおばあちゃんのうち」とは、施設が木製の平屋であることだけではなく、利用者にとって子育てをバックアップしてくれる信頼できるシンボルとも読みとれる。語りに出た施設側の支援者Cに心掛けていた支援を尋ねたところ、「目の前にいる利用者が何で困っていて、どんな支援が必要としているのか、その人の気持ちになって見極めることを大事にしていた。例えば、ここのパン屋さんが美味しいよ、この季節だから外に出てこんな遊びができるよという感じで、現在の目の前の生活が楽しめよう、また子どもの発達の遅れについて長い目でみるように助言したり、ママの友達を増やしたりするように」と述べている。

その点に関して、施設の先生が子どもの成長を積極的に利用者に伝えることが語りからも出ており、利用者がそれをありがたく思っていることから、支援者と利用者の心がつながった瞬間がうかがえる。このような民間施設の支援は、完璧で育児本通りの子育てに追い詰められたケースにおいても、信頼関係が作られたことで本来の狙いであった支援効果が如実に現れた。これは母親が受けたサポートに対し、「助かる」「嬉しい」というポジティブな評価が育児肯定感につながるという指摘(鮎・向井, 2016)が裏付けられる。また、「キラキラのおもちゃでなくラッキー」や「ママ友と深入りしない、軽く楽しむ」という表現から、育児につい

て相手と比較することで生じ得る支援ネットワークの負の効果(二見・荒牧, 2021)が、この「昔のおばあちゃんのうち」では、うまく回避できていたと考察できる。

また、長男の幼少期の子育て環境と次男の子育て環境が対照的だったことも印象深い。質問紙調査からも、長男の時の親の辛さと、次男との望ましい関わり方、現在の子どもの発達状況を具体的に感じ取ることができる。母親が認識している「一人目」「孤立」「ワンオペ育児」といった育児に対する阻害要素からの影響をこの事例においては顕著に表している。それと同時に、長男の時に受けた支援は、一時的な困難を凌ぐ効果だけでなく、その経験は母親の自信となり、その後の子どもの成長につながる長期的な効果も考えられる。それと相まって、今回のインタビュー調査をきっかけに、利用者Aはほかの子育て中で困っている親のためになろうとして、子育て支援の資格を取った。利用者の家庭内に限らず、社会に向けて支援の良い循環が生まれようとしていることも、支援の意義の深さを感じさせられる。

また、利用者Aは自分の経験を振り返り、「頼るのは恥ずかしい」「頼れるものはなんでも頼る」と言葉を強めている。今回、支援にアクセスできたカギは、本人が困った際に外へ目をむけ、施設を利用し、支援情報を求める力、支援を受ける力を持っていたことである。これについて、利用者側がニーズを抱えていても「支援を求める力・受ける力」不足で十分に利用できない人を支援すべきだとの指摘もある(横山・高木, 2018)。「どのように支援を求めたらよいのか、どう助けてほしいのかもわからない」という親に、被援助志向性を高めるアプローチが大切である。

本事例では、民間施設への厚い信頼と対照的に、行政への不信が強かった。「マニュアル通りの対応」、「自分の育児が責められた」はこの事例のような十数年ほど前のことだけでなく、現在筆者が実施している乳幼児を持つ母親のインタビュー調査からも、時折聞かれる意見であった。大学生の援助者と被援助者の関係に着目した研究では、「被援助者の考え方・感情を理解しない、または尊重しないという援助者の態度」、「プレッシャーとなるサポート内容」、「親密な関係でない、または身近でない援助者であること」などがソーシャル・サポートのネガティブな効果につながる要因だと分析している(菊島, 2003)。また、乳幼児の母親が認知する「被援助に対する懸念」と「医師・看護師・保健師」に求めるソーシャル・サポートの程度との間に弱い正の相関が報告されており(日下部, 2014)、支援ニーズを抱え専門的サポートを求めるほど、援助に対する不信感も募らせる様相が考えられる。したがって、支援の効果を保障するため、田井(2019)が指摘しているように、支援者への支援も重要である。利用者の心に寄り添う心理的支援ができるよう、

支援者と利用者の関係に留意し、さまざまな立場の支援者をバックアップする必要がある。

最後に今後の課題について述べる。本研究は、民間施設を利用し、育児困難を克服した一事例を、その後の子どもの発達を含めて、インタビュー調査と質問紙調査を合わせて、詳細に検討することが出来た点がオリジナルであった。しかし、1事例の振り返りによるデータであることから、普遍性に欠けるという限界がある。全国の地域子育て支援拠点事業を運営する団体(計240団体)の利用者のうち、7割以上の母親は「自身が育っていないまちで子育て」を行っており、また6割の母親は「子どもを預かってくれる人はいない」(NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会, 2017)という状況は、本事例の子育て困難の背景と重なっている。このような支援ニーズを踏まえ、現在進行形で施設を利用している親を含めた、さまざまな背景を持つ複数の利用者のデータを用い、さらなる検討が今後の課題となる。そうすることで、民間施設に期待する行政サービスを補う機能が一層実現できるだろう。

結論

本研究では、1事例に関する詳細な検討により、次のような示唆が得られた。①孤立、一人目の子育て、完璧な子育て、育児書通りの子育てといった要素は、親のうつ状態を生む「暗黒時代の子育て」につながる。②その悪循環から脱出できたのは、民間子育て支援施設を利用したことであった。「昔のおばあちゃんのうち」というあり方が信頼関係を生み、孤立の解消、育児のモデル、子どもと離れる個人の時間の確保、一緒に楽しむ仲間によるリフレッシュといった支援効果につながった。③親が自ら支援を求め、支援を受けるには必要な「被援助志向性」や利用者の心に寄り添うことができるよう、行政によるフォーマルな支援者への支援も必要である。

謝辞

本論文の遂行にご協力をいただいた民間子育て支援施設の担当者様をはじめ、インタビュー調査などにご尽力した利用者様に心からお礼申し上げます。また、本論文の執筆に際して快くご助言をくださいました静岡福祉大学上野永子先生に深謝いたします。

付記

本研究は JSPS 科研費 18K03073 の助成を受けて進めているものの一部である。利益相反はない。

引用文献

- 浅川潔司・尾崎高弘・吉川雅文(2003): 中学校新入生の学校適応に関する学校心理学研究. 兵庫教育大学研究紀要 **23**, 81-88.
- 足立智明(1999): 障害をもつ乳幼児の母親の心理的適応とその援助に関する研究. 風間書房.
- 薊奈保子・向井敦子(2016): 子育て中の養育者のニーズと育児支援のあり方についての一考察. 人間生活文化研究 **26**, 157-161.
- 二見雪奈・荒牧草平(2021): 母親の育児不安に対する育児ネットワークの多様な効果: 支援機能と参照機能の違いに着目して. 日本女子大学紀要 人間社会学部 **31**, 37-50.
- 菊島勝也(2003): ソーシャル・サポートのネガティブな効果に関する研究. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 **6**, 239-245.
- 小堀修・丹野義彦(2004): 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み. パーソナリティ研究 **13**(1), 34-43.
- 日下部典子(2014): 乳幼児を育てる母親のソーシャル・サポート希求と被援助志向性. 福山大学人間文化学部紀要 **14**, 53-61.
- 廣瀬久益(2014): 新宿オーピー廣瀬クリニック・自立の公式—自分で選ぶことが大切—. <https://www.youtube.com/watch?v=jgAmPYz5CWs> (2020年10月1日検索).
- NPO法人子育てひろば全国連絡協議会(2017): 地域子育て支援拠点における「つながり」に関する調査研究事業報告書. https://kosodatehiroba.com/new_files/pdf/away-ikuji-hokoku.pdf (2021.11.10検索).
- 田井康雄(2019): 「子育て支援」の基礎理念についての考察. 人間科学 **10**, 60-67.
- 中川泰彬・大坊郁夫(1985): 日本版GHQ精神健康度調査票手引. 日本文化科学, 東京.
- 中岡泰子・小川佳代・富田喜代子・加藤孝士ほか(2017): A県における子育て支援イベントの利用実態. 四国大学紀要 人文・社会科学編 **49**, 13-22.
- 中谷奈美子・中谷素之(2006): 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. 発達心理学研究 **17**, 148-158.
- 石曉玲・藤村和久・荘巖舜哉・関口はつ江(2020): 子どものネガティブな感情表出を受け止める養育力と母親のパソーナリティ要因との関連. 日本発達心理学会第31回大会, 於大阪国際会議場.
- 田中昭夫(1997): 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究. 乳幼児教育学研究 **6**, 57-64.
- 上田よう子(2018): 地域子育て支援拠点における利用者の心情変容プロセスを支える支援に関する研究: 複線径路・等至性モデル分析による支援の検討. 保育学研究 **56**(2), 247-255.
- 内田伸子(2017): 学力格差は幼児期から始まるか?—経済格差を超える要因の検討—. 教育社会学研究 **100**, 108-119.
- 山本裕之・平野吉直・内田幸一(2005): 幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 **5**, 69-80.
- 横山順一・高木健志(2018): 自助・自己責任の時代における新たな支援のあり方を考える: 福祉的課題を抱えた人の「支援を求める力・受ける力」の可能性に着目する. 山口県立大学学術情報 **11**, 87-92.

Exploratory Study of Support and Effectiveness in Private Child-rearing Support Facility: From the Narratives of a User

Xiaoling SHI

School of Childcare and Early Childhood Education,
Tokyo University and Graduate School of Social Welfare (Ikebukuro Campus),
1-22-1-3F Minami-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-0022, Japan

Abstract : The purpose of this study is to examine the known how and effectiveness of a private child-rearing support facility by focusing on one case, who has childcare difficulties. The following suggestions are obtained from a detailed examination that includes a survey by a semi-structural interview and a questionnaire. [1] The elements of isolation, first child, perfection, parenting according to the childcare book lead to the “depression” of the mother. [2] It is important that the private child-rearing support facility to be “of the old grandmother”, and it has the effect of eliminating isolation, a model for child-rearing, securing time for individuals away from their children, and refreshing with friends who enjoy together, to escape from a vicious circle. [3] It is also necessary to support the “help-seeking preferences” that parents can ask for and use their own support, also support formal supporters so that they can be close to the hearts of users.

(Reprint request should be sent to Xiaoling SHI)

Key words : Private child-rearing support facility, Known how, Effectiveness